博士（文学）学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	弓場　苗生子
論　文　題　目	趙宋天台における円融論の展開

審査要旨

中国天台の教学は智顗によって確立し、その後、六祖である唐代の湛然の中興により、諸註釈が具備することになった。日本天台は最澄が湛然の弟子に師事したことから大きな発展を見るが、中国天台は異なった展開を示す。それが趙宋天台と言われる宋代の天台宗である。山家・山外という両派が対立し、細かい問題を掘り起こして論争した。その内容は、微に入り細を穿つものであるため、従来その研究はあまり多くない。若干の充実した研究があるものの、研究課題はあまりに多く、本研究はその一歩を進めたものと言える。

こういった研究では、当然、天台教学の基本を押さえておく必要がある。論題の中の「円融」は天台学の中枢であり、相即という語と相俟って根幹となる概念を示す。本論文では、それが趙宋天台でどのような理論構成のもとに説述され、互いに論難を施したのかということを、幾つかの着眼から論述する。全体的な目次を示せば、次のようである。

序　緒論（趙宋期における論争の概要）

第一章　智顗の円融論と湛然による解釈（一　智顗の教説中における四句分別の用法、二　三軌三法の開説とその展開）　第二章　四明知礼の教学とこれに対する反駁（一　四明知礼の教説、　二　後山外派説における相即の譬喩、三　後山外派の相即解釈における継承と発展――別理随縁の論争、四　理毒性悪の論争）　第三章　神智従義の教説（一　従義による三身解釈、二　複俗義に対する解釈）　第四章　後世の学匠らによる論争の総括（一　智湧了然における二義判釈と具相家・具性家の判、二　智湧了然の理性差別義解釈、三　柏庭善月の仁岳説批判にみる論争の総括）　第五章　修性離合義を巡る論争（一　知礼の示した判釈とその影響、二　山外派による修性離合義の解釈、三　後期の山家派における修性離合義の判釈について）　結語

附録　「別理随縁十門析難書」訳註

要するに、智顗に始まる天台教学が宋代において諸学匠によって多様に議論されたのである。当面の課題は、それらの当否を論ずるのではなく、それぞれの主張を理解して明示することであろう。本論文はその解明において、焦点を絞っての論考となっているので、論考としての纏まりを示している。

智顗や湛然の教学はその一部分でも重要な研究対象であり、未解明となっている課題も多い。加えて、智顗以降の法蔵による華厳教学の大成は、天台教学に同じく円の義を最重視する。従って、湛然やその後の研究には法蔵の教義や影響関係も研究領域を拡大する必要があり、課題は多い。しかし、そういった研究を行うためには基礎的研究を積み重ねるよりなく、この研究論文もそういった観点からの評価ができる。

先ず第一章では智顗と湛然の円融論について述べる。勿論これはそれだけで大きな論文の課題にもなるものであるが、後章へと導くための極めて限定的な導入的検討となっている。第二章は、趙宋天台の核心となる山家派の四明知礼についての基本説の解明と、その批判的立場となる山外派や知礼と袂を分かった後山外派の仁岳による論駁の分析を行う。これらは基本的な動向であるとしても、その内容は煩瑣であり、原典の理解には努力が要求されるが、まさに天台法門の趙宋天台としての展開と言えるものである。第三章は、やはり山家派に属しながらも、知礼説を難じるようになった従義を扱う。この章では天台教学のみならず仏教学における根本説の一つともいうべき仏身論が扱われる。第四章では、了然と善月という山家派に属する後代の学匠による総括としての議論を検討する。そこにおいて、新しく独自の理論が提示され、特に具性・具相という観点による整理が示されたことを特記すべき事柄として論じている。それは仏身・仏土の議論とも密接に関連する。第五章は、山家派による修性離合義についての見解を広く確認する。ここでは、先行研究に導かれつつも、新たな

氏名　弓場　苗生子

視点を提供すべく議論を展開する。これらの五章に続けて、簡略ではあるが、結論が示され、全体の要点が述べられている。

趙宋天台の研究は基本的な文献研究が遅れているので、研究者は原文を丁寧に読み込む必要がある。この論文では、引用文に対して丁寧に句読点や返り点を付し、筆者による研鑽が伝わってくる。但し、そこで使われている用語は独特のものも多く、読み手の便のためにもう少し語釈等の解説を増やす方が好ましい。全体として細かい教理を扱うので、分かりやすい説明がほしい。或いは、漢文による引用文の後に訓読文をつけるのも一方法であるし、引用文についての解説についても概略を示すなど、書き方自体について一考を要する点もある。加えて、論文の文体が平明とは言い難く、それはただでさえ難解な議論を、広く伝えるのには効果的な表現方法とは言えないであろう。このことは出版時に十分考慮する必要があろう。内容が難解であるのは、原典の議論が錯綜しているからであるが、それを同分野の専門家以外の人にも理解してもらうための一層の努力を望みたい。

その他、論文中に見られる術後の中には西洋哲学に基づくものや、一般的でないため理解が容易ならざるものがあり、それが意味するところを明示しての依用を心掛けてほしい。

最後に附録として「別理随縁十門析難書」訳註が収められている。同文献にはこれまであまり知られていなかった学匠の思想を伝える逸文が含まれる。訳注では校訂もなされ、論争の内実を探る新たな資料として注目されよう。これにより、漢文文献を扱う筆者の力量が知られ、本論文を充実させている。なお、こういった文献の訳註制作には時間が掛かるが、現段階では用語等の解説については不十分であり、今後の充足が不可欠である。併せて、文献解題や大意を示すことは必須であろう。

以上のように、論考の各章には若干の補正が必要であり、また、訳註の完成にはやや時間が必要であると考えられる。とはいえ、難解さもあってか、研究が遅延していた当該分野に正面から取り組み、新たな方向性を示したことは研究業績として十分評価される。従来の日本の研究だけではなく、中国語による海外の研究を参看していることもよい。本論文は、博士（文学）の学位を授与するのに十分価すると判断される。

公開審査会開催日	2018 年　4 月　27 日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大久保　良峻	仏教学（日本・中国）	博士（早稲田大学）
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山部　能宜	インド哲学・仏教学	博士（イェール大学）
審査委員	駒澤大学仏教学部・准教授	山口　弘江	中国仏教・天台学	博士（駒澤大学）
審査委員				
審査委員				